

町内事業所長×町長 対談

第8回 株式会社箕浦 代表取締役会長 箕浦 浩二様

町内でものづくりを行う事業所や工場の活動を、事業所長様と町長の対談を通して紹介する企画です。第8回目の今回は、株式会社箕浦 代表取締役会長 箕浦 浩二様との対談です。



箕浦 スタンドから箕浦へ

谷村

本日はよろしくお願ひします。箕浦様といえば、やはり「自転車」ですね。

箕浦

ありがとうございます。昭和8年に自転車のスタンド、荷台の製造販売をする「合資会社 箕浦商会」として創業しました。その後、社名を「有限会社箕浦荷台スタンド」と改称し、昭和28年に株式会社化し現在にいたります。

谷村

そうですね、「スタンドさん」のイメージが大変強いです。この業務内容でスタートしたきっかけを教えてください。

箕浦

創業者である父が、インドへの輸出をターゲットとして始めたので

す。当時インドは、イギリスの植民地であり、自転車が多く持ち込まれました。しかしその自転車にはスタンドと荷台がなかったの

で、そこに着目して製品を輸出しました。

成功の後押しは、繊維業が盛んであったというこの地域の特性です。繊維を出荷するときに原毛を締めていた鉄の帯を、材料として上手く加工して製品を作ったのです。「リサイクル」ですか。それは当時としては画期的だったでしょうね。

谷村

箕浦

とるが現在は、そのイメージされているスタンドは皆無と言っていいほどしか製造しておりません。それにも何かきっかけが。

箕浦

はい。昭和48年に起きた、第二次オイルショックです。それまでは、第二次世界大戦中こそ軍需産業の

製造工場となりましたが、戦後は引き上げた沈没船から鉄を採り、それを材料に大手企業の下請けとしてやっていました。

しかし、オイルショックが起き、仕事が半減したのです。その状況を目の当たりにし、「自分たちのブランドで、自分たちのものづくりをしなければ。」と思い、自社製品を開発するスタイルへと変化しました。こうして、スタンドに捉われずそれ以外の製品を作るようになりました。

谷村

そうして、創業60周年を迎えた平成4年に、社名からスタンドの文字を取ったのですね。

そして世界へ

谷村

貴社では俗にいう「ママチャリ」に関しては何も扱っていないのですか？

箕浦

そうですね。マウンテンバイクやロードといったスポーツバイクの、本体ではなくその関連用品を専門にやっています。世界で初めて開発した磁石式の自転車室内練習機をはじめ、スマホホルダーや、自転車室内保管用のラックなどを生産しています。ただスポーツバイクは、国内自転車市場全体の1割程度しかなく、海外の大きな市場を相手にする必要があります。

谷村

「世界のミノウラ」ですね。ありがとうございます。昭和48年にオリジナルの自社ブランド製品

でやっていくスタイルに変え、約30年かけて世界へ浸透させていきました。お陰様で、現在は自転車業界ではどの国へ行っても、名前を知っていただける状況になりました。



▲箕浦浩二会長

新製品開発のアイデアは、お客様とのやり取りの中から得ています。そして、その声を早く形にするために、県下でもいち早く3Dプリンターを取り入れ、当時はメディアに紹介していただいたこともあります。

神戸町という土地で

谷村

ずっと神戸町で操業を。

はい。井田で創業し、戦後に拡張のため昭和町に第2工場を建てました。その後、川西への本社工場の移転を経て、昭和44年に現在の場所へ本社と本社工場を設置しました。

谷村

創業者である父の生まれ故郷、神戸町です。とやらせていただいております。

箕浦

会長から見た神戸町は、どのような印象ですか。

良いところですね。環境もよく、静かですね。水も良いです。もつと人口が増えてもいいと思いますね。もうすぐ完成する高速道路も影響が大きいと、期待しています。

谷村

大野神戸ICは平成31年度に完成予定ですが、全線が開通しないと効果がないので、少しでも早い開通を沿線市町で強く要望しているところです。

従業員の方は神戸町の方が多いですか？

現在54名の社員がおりまして、う



谷村

ち22名が神戸町民です。弊社としても、地元の方に是非、という思いもありますので。

箕浦

ありがとうございます。働く方は、やはり自転車が好きですか。

谷村

ええ。近年は続けて高校卒業者を採用させていただいておりますが、皆自転車が好きですね。自転車に関わりたくいと、埼玉県から入社してくれた社員もいます。

箕浦

朝、ロードバイクで通勤される社員さんをよくお見かけします。好きなことに仕事で関わられるのは、やりがいがあるでしょうね。

本当に自転車が好きなのは、楽しくて仕方がないみたいです。大好きなことにもつわる物を開発して、それが市場に出ていく。技術者たちはものづくりの楽しさが一番感じていると思います。社内には自転車クラブもあり15名が所属しています。レースに出たり、ツール・ド・西美濃の先導員をやらせていただいたりしています。

異色の新事業と、これから

谷村

平成11年からは、自転車用品以外の事業も始められたのですよね。

箕浦

コンダクションチューブという、加冷温装置の製造・販売を開始しました。物質の衝撃エネルギーにより発生する波長を、養鶏場や堆肥発酵施設、床暖房などで熱源として活用するという装置です。さらに、テラヘルツ帯の赤外線が、生物の生育に有益な効果をもたらす波長なので、温室等で利用すると省エネルギーに加え収穫量の増加を達成することが可能になります。

谷村

どのような経緯があり、この事業内容を始めたのですか。

箕浦

ある会社で、医療用歩行器の負荷の調整を自転車の調整員を利用して開発したことがあり、それをたまたま医師が見ていました。その先生は工学（熱源装置の仕組み）を農業に利用できないかと考えておられて、私が機器を調整しているところを見て「その技術を使つてやってみないか？」と誘っていただいたのです。

箕浦

これからはそちらにも力を。これは難しいので、やはりこの分野を伸ばしていきたいです。熱はどこにでもあり、必要なものです。市場は本当に無限大にあると思いますので、今後製品の量産体制を整えて業績向上に努め、創業

谷村

以来お世話になってる神戸町に恩返しをしたいと思っております。貴社ますますのご発展をお祈りしています。ありがとうございます。

箕浦

ありがとうございます。



株式会社箕浦

- 創業 昭和8年
- 所在地 神戸町大字神戸1197番地の1
- 資本金 2,240万円
- 売上高 約10億円
- 主要製品 自転車用品関連製品
冷暖房熱源および設備関連製品